Rolling Stone

(個人の重力—③)

WORLD MOST-EXTREME SNOWBOARDER

DAMIAN SANDERS

ダミアン・サンダース

interviewed by TOKO
commented by ISHI
screenplayed by TOKO

モヒカンの怪人、逮捕さる。

さる92年3月、湯沢パークスキー場において、我々編集部(以下当局)はかねてより指名手配中だったダミアン・サンダース(23、以下甲)を捕捉、身柄を拘束し、パークホテルの喫茶コーナーにおいて1時間半の尋問を行なった。甲の容疑は、70フィートのクリフジャンプ、バックフリップを初めとする危険行為と、ペントハウス誌ペットとの結婚、モヒカンヘア、ロックバンド結成など枚挙にいとまがない享楽的行為である。上は元来健全であるべきプロスポーツ選手にあるまじき行為で公序良俗を乱すこと甚だしく、100万ドル以下の罰金刑に値するに余りあると思われる。以下は、検事TOKO、弁護人ISHIの、取り調べ結果である。なお甲は現在控訴中で、罪の有無は陪審たる読者諸兄の判断に任せられる。

被疑者提出証拠物件その①

容疑者履歴

履歴書　1992年 3月 12日現在

ふりがな　ダミアン　サンダース
氏名　DAMIAN SANDERS　性別 男・女
生年月日 昭 44年 12月 7日生 (満 22才)　本籍 アメリカ
現住所 〒(−) アメリカ・カリフォルニア州 レイク・タホ
連絡先 〒(−) アバランチ(株) カリフォルニア州 ヘニシア

学歴・職歴(各自によりて記)

年	月	
1969		ワシントン州バンクーバーに生まれる。
1973		4歳。車に4回ハネられる。
		同年、躁病の治療のため精神科に通う。
1981		13歳。レイク・タホでスノーボードを始める。
1982		14歳。ダナースキーランチで大会デビュー。
1987		18歳。トランポリンで頸椎骨折。
		同年、妙高の70mスキー・ジャンプを飛ぶ。
1989		20歳。"ウエスタン・フロンド" でビデオデビュー。
1990		21歳。マクドナルドのTV CMに出演する。
		同年、ペントハウス誌モデルと結婚。
1991		22歳。性格不一致により離婚。
		職歴
1982		14歳。プロ・スノーボーダーになる。 以上

免許・資格

年	月	
1985		普通免許取得。
1986		バックフリップ等をマスター。
1987		エコーバレー・チャレンジPSで優勝。

得意な学科: 英会話。
趣味: モダン・ロック演奏。
スポーツ: スノーボード・サーフィン スケートボード
健康状態: 膝を負傷中。
正望の動機: 1. スノースタイル誌の将来性。 2. 自分を見つめ直すため。
本人希望記入欄(職種・職域・勤務時間・職務内容・その他についての希望などをかきのばす): 将来はロックスターになり、法律事務所を開き、スノーボード・ブーツやバインディングを作って売りたい。

家族氏名	続柄	年令
サンダース・ハロルド	父	
シャロン	母	
クリス	兄	33
クレイグ	兄	32
ブライアン	兄	31

家族氏名	続柄	年令
マリア	姉	29
カーラ	姉	27
ドロシー	妹	22

WANTED

医者がレントゲン写真を持って廊下を走ってくるんだよ、

—●ダミアンくん、この取り調べはだね、君が教育上有害なんじゃないか、それを証明することがが狙いなんだよ、

DS●Oh、

—●調書によるとだな、えーと、87年、きみは頚の骨を折って、頚の骨を折ってだな、知らずにスノーボードしてたというじゃないかっ、これは事実かね、

DS●ああ、あれはね、スノーボードじゃなくてトランポリンで折ったんだ、スノーボードを履いてバックフリップ（バック転）の練習してたら、2回転したんだけど、どっかにブツけちゃったらしんだな、知らずにスノーボードしてたんだが、なんか変だなと思って病院に行ったら、医者がレントゲン写真を持って廊下を走ってくるんだよ、

頚が折れてるっ、すぐ入院しろっ（笑）、あのときは18で若かったから良かったけど、いまだったら半身不随になってるかもねえ、

—●（絶句）……えーと、その年、87年、きみは初来日してるな、妙高の70mのジャンプ台を飛んだろ、サイドウェイ・スタンスのスノーボードで、スキーのジャンプ台を飛んで怖くなかったのかね、

DS●スキーのオリンピックみたいに凍らせてなくて、そこらじゅうディープパウダーだったからスーパーイージーだったよ、

—●90年、きみはマクドナルドのTVCMに出たな、えらく高い崖を飛んで、ハッハーと笑いながらビッグマックを食っただけで、えらく稼いだそうじゃないか、

DS●CMのスタッフがスノーボーダーを捜してて、プロショップとかで誰が使えるのか尋ねてまわってて、ぼくの名前が出た、ぼくしかいなかったんだよ、みんなはPSTA（アメリカのプロ・サーキット）のコンペに行ってて、暇なのはぼくしかいなかった、

—●その資料は見てないんだが、どこで撮影したのかね、

DS●コロラドだよ、あれは今までいちばん高い崖だった、ドロップオフが40フィートあって、その下の斜面までさらに30フィートあった（弁護証言④参照）、クリフは飛ぶまでどれくらい落ちるか分からないんだよ、もう一度クリフの上まで登ってマーク（着地跡）を見て、70フィート、オーノー、飛んだあとで怖がってんの（笑）、

ギャラ？ 11000ドル（140万円）そのときの着地で膝で唇を打ってね、7針縫ったんだ、1針が、えーと、1500ドルで、治療費も出たから、ま、悪くないね、

—●例のビデオ、スノーボーダーズ・イン・エクサイルのあのクリフジャンプより高かったのかねっ!?

DS●あー、あのスティーブ・グラハムとダブルスで飛んだのね、あれも高かったけどマクドナルドほどじゃない、65フィートくらいじゃなかったっけ、

（※スティーブ・グラハムはタホのローカルで、ダミアンのところに居候して、ダミアンと滑ってうまくなった、いわば直系の弟子。このビデオで彼はダミアンと同時に同じクリフを飛び降り、ダミアンより遠くに着地し、ダミアンより飛ぶ男として、その名を売った。ダミアンは自分の弟子ながら、いちばん好きなスノーボーダーはスティーブ、と言っている）

—●ビデオといえば、91年冬に撮影したクリティカル・コンディションで君は崖飛びのあと着地でパウダーに埋まって、4分も出てこれなくて死にそうになったというじゃないか、命が惜しくないのかね、

DS●いや7分だよ、**窒息死しそうになったよ**（笑）あれは事故なんだ、埋まるようなところに降りたりするもんか、あれは先に飛び降りたショーン・ファーマーがつくった穴に落ちてしまって、それで埋まったんだよ、怪我はしなかったけど、精神的には致命的だった、だってほんとに死ぬと思ったんだから、

—●きみぃ、偽証は許されないんだよ、精神的には致命的だった、なるほど、でも君はその年の夏、カナダ・ブラッコムでまた高い崖をやって、膝を壊したじゃないか、（※ダミアンは91年夏のこの怪我以来リハビリ中で、この冬やっとなんとか滑れるかな、というあたりまで回復した）

DS●**Yeah、膝は最悪だねえ、頚を折ったほうがマシだよ、**ブラッコムのウインドリップで友だちとハイエアー・コンテストをやって、どちらが高くいけるかプッシュしすぎて、はは、また無理をしてしまった（笑）

—●回復したらまた飛ぶのかね、

DS●うん、HUGE CLIFF（めちゃ高い崖）は無理だけど、BIG CLIFF（けっこう高い崖）はやれると思うよ、

—●親御さんを泣かすもんじゃないよ、

DS●だって泣いてるよ、

—●崖から飛び降りたりバックフリップするのは君の勝手だよ、好きなことをやりゃあいいんだ、問題はだね、君がビデオスターであることなんだ、子供や、あたまが子供の大人が真似するんだよ、

DS●かれらは、ぼくがプロだということを認識すべきだね、**プロとは、自分のやれることとやれないことを、わきまえてるってことだ、**クリフジャンプひとつとってももう10年もやってる、ケガのリスクを負う、限界までもってゆくことはほとんどしないよ、ほら、プロのスタントマンは怪我しないでしょ、自信がないと、ジャンプはしない、

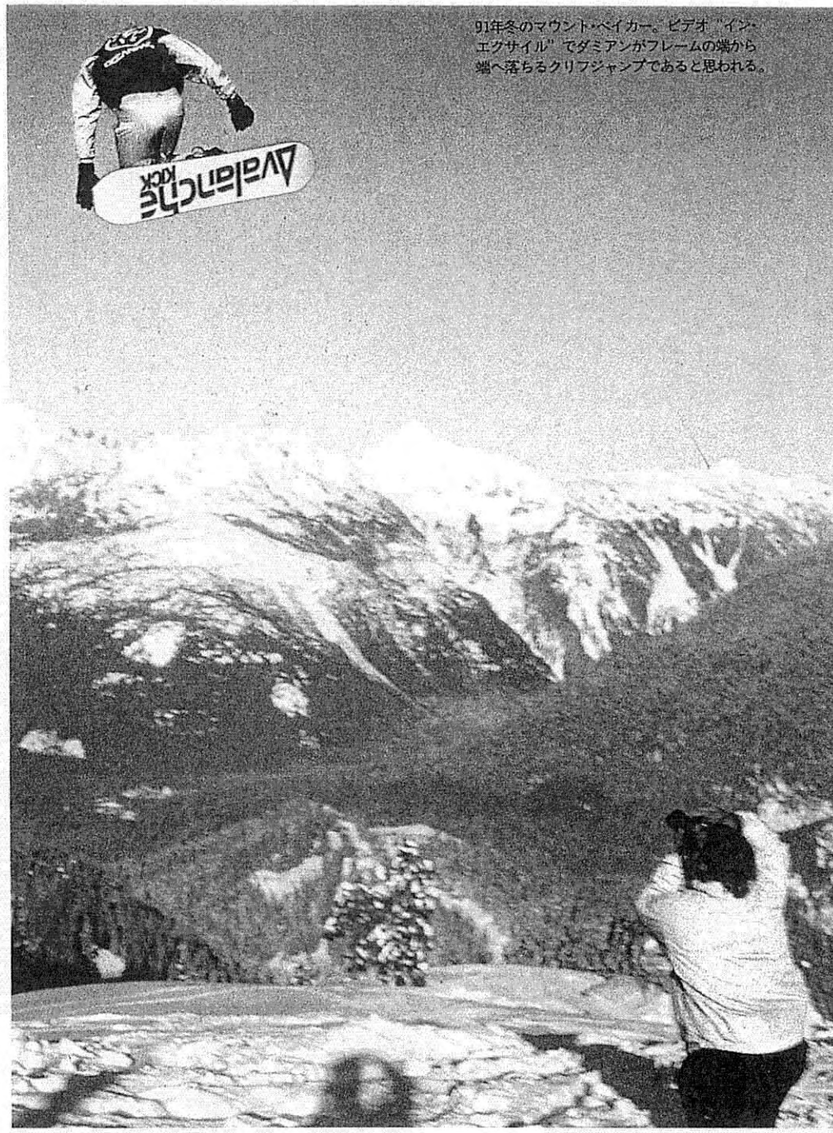
—●でもじっさい君は怪我してるじゃないか、

DS●気をつけていても事故はあるもんだよ、

—●でも君には、慎重、という言葉は似合わないね、それは君のイメージ操作なのかも知れんが、

DS●やるか、やらないか、をジャッジするのはやはり自信だね、自信があればやる、なければやらない、高いクリフに行って、友だちに飛べ飛べとプッシュされても、カメラが回っていても、自信がなければ

©Yoshiro Higai 1991

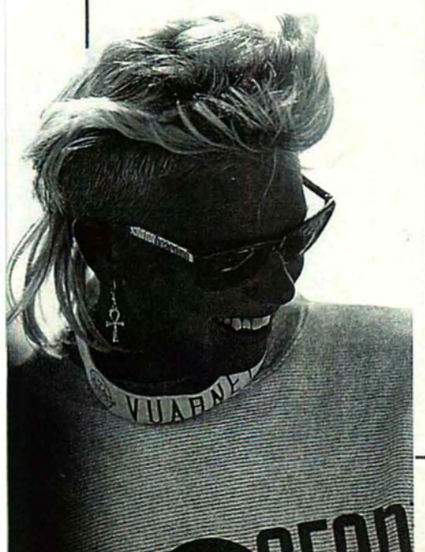


91年冬のマウント・ベイカー。ビデオ"イン・エクサイル"でダミアンがフレームの端から端へ落ちるクリフジャンプであると思われる。

ISHIの弁護証言その—①

「やつはタホとミスマッチ」

ダミアンのホームタウンはカリフォルニアのレイクタホなんですけど、タホって、山と湖と雪があって、釣りができてロッククライミングができて、サンフランシスコやロサンゼルスの人がバカンスにきてほっとするみたいなスーパーメローな場所なんです、土地の人もみんなネルシャツを着ていちばん上のボタンまで留めててトラックに乗ってるんです、ダミアンみたいに髪の毛逆立てて革ジャン着てバイク乗ってるなんて、そんなやつダミアンしかいない、**湯沢にパンクがいるようなもんなんです、**髪は朝ガチンコスプレーで必死こいて立たせるんだけど、ダミアンのヘアスタイルって側頭部を剃った**幅広モヒカン**じゃないすか、だから夕方髪がべしゃっとなって寝ると、単純にかわいいヘアスタイルになっちゃうの、ダミ公ってねえ、クレイジーな格好したり滑りしたりするけど、**ほんとは育ちがよくて優しくて、**屈折してるコじゃないんです、他人にミーン（非行）なふうに見られたいと自分でも言ってますしね、あるいは起きてから寝るまで演技し続けてるんじゃないかな、そしてそれが板についてる、ほかの人が真似したら、おいおい無理すんなよってかんじだけど……ダミアンってねえ、今はスノーボードしてるけど、映画スターにもなれそうなヒトなんです、**私生活からして映画みたい**だしねえ、30になったらロックスターになるってマジで言ってるし。



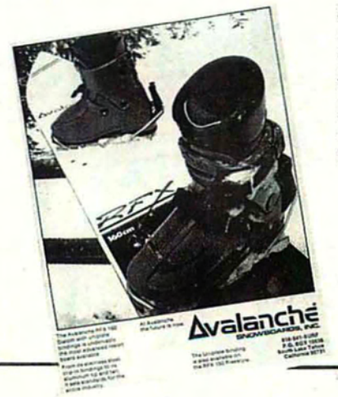
90年ルスツにて。かれのファッションやイメージは全くのオリジナルで先例はない。モヒカンも、バッフリップも、ライフスタイルも。

©TAKI 1990

ISHIの弁護証言その—②

「あいつの最初の板は、兄貴の手作りクリスマス・プレゼント」

13歳のクリスマス、ダミアンはサンノゼのグレミックというスケートボードの店にあったバートンの板を見て「かあちゃん、これ買うてくれ」って言いよったんですわ、でも兄貴のクリスが、彼は当時22くらいだったと思うんですけど「こんなんやったらわし、作ったるわ」言いおって、かあちゃんに買わせんかったんですわ、ダミアンが13のときゆーたら82年でしょ、いまのようにスノーボードがビッグビジネスになるなど考えられなかった時代で、バートンとシムスしかなくて、そのボードも家内工業的な製品だった。ベニヤ板を曲げて溶かしたアクリルにドブ浸けしただけで、もちろんエッジなんかない、だからクリスも自作できると思ったんやろねー、バートンは東部のバーモント州で、シムスはカリフォルニアのビーチフロントのサンタバーバラで、クリスはタホでしょ、ダミアンへのクリスマス・プレゼントとしてスノーボードを作ったのを切っ掛けにして、タホの少年たちにボードを作って売るようになったんですわ、それがアバランチになった、まあハワイのサーフボードのシェイパーみたいなもんですな、ショーン・パルマーも当時はアバランチのファクトリーで働いていた。バインディングはまだなくて、廃タイヤで作ったスリッパみたいの、ウインドのフットストラップみたいのが、それも前足だけついてるだけだった。バートンはノーズから出たコードを引きつつ滑るシステムだったから膝のアンギュレーションが取れ、バインディングの開発に熱心じゃなかった。シムスとアバランチが同時期にハイバックを開発したけど、"SURF ON SNOW"を標榜してたシムスはハードブーツを無視してたんです、アバランチだけがこだわりがなくて遠くを見渡す視線を持っていて、84年には世界で初めてプレートバインディング（ハードブーツ用のバインディング）を開発したんですよ、アバランチはどこより先進的なメーカーだった、キャッチフレーズも**"SPORTS GROWS UP"**だったしね、でもメインストリームにはなれなかった、レースとジョイントすることに熱心じゃなかったし、当時ボードが$300くらいで、兼用（山スキー）ブーツが$280くらいしたから、$600もあったらアメリカじゃクルマが買えるでしょ、とうぜん売れなかった。ダミアンはアバランチのメインライダーで、とにかく彼とアバランチはそんなふうにやってきたんです。



84年、アメリカの雑誌に出稿したアバランチの広告。このとき同社はすでに世界初のハードバインディングを商品化している。

©Bud Fawcett 1997

91年、PSTAバンクド・スラロームの大会"レジェンダリー"のあと大雪になり、まるでサーフィンのようなライディングを見せる。

70フィート！オーノー、飛び降りたあとで怖がってんの(笑)、

やらない、
ぼくはいつだって人の言うことは気にしない、いつもぼく自身がぼくの主人であろうとしてる、
自分の能力も分かってる、でも時々、自分の能力以上にやれそうだと思うことがある、そんな時怪我するリスクが高い、ぼくはプロだから、怪我を避ける、怪我を軽くする方法を知っている、あまり怪我しない、たまに頸を折るくらい（笑）、ぼくでさえそうなんだ、ということをキッズたちは分かってほしい、

——●怪しいな、君には、初めての崖でも下を見ないでポンと飛ぶという伝説があるじゃないか、下を見ないでポンとな、

DS●ノーノー、ビデオには飛ぶところしか映ってないからそういういいかげんな噂が流れるんだよ、スティーブ・グラハムみたいに世界一クレイジーな男でも雪を投げたりして着地点の雪が柔らかいか、どういうラインで飛び降りるかさんざんチェックしてからトライするよ、下を見ないで飛び降りるなんて自殺だよ、そんなことやりゃあしません、

——●そのわりには怪我が多いね、

DS●だからアクシデントです、すこし自分の限界をプッシュしすぎてるきらいはあるかもしれない、それは認めます、

——●雪崩とかクレバスとかについてはどうなんだね、

DS●雪崩に遭ったことはない、でも撮影は人のいないところに行かなきゃならならないから、ときどき怖いことがあるよ、

——●雪崩とか、山についてはどう学んだの

89年、レイク・タホにて。ダミアンが乗るボードは彼にとって初めてのシグネチャーモデル、アバランチの"ダミアンキック"である。

©Bud Fawcett 1989

ISHIの弁護証言その—3

「やつこそ、スロープ・スタイラー」

総合滑走能力、っていうことをテーマにして弊誌5号でスロープ・スタイルという特集を組み、PJをフィーチャーしましたが、ダミアンこそスロープ・スタイラーなんです、いまでこそフリーライディングで食えるけど、かれはそれを一人で、いちばん昔からやってるわけですからね、ダミアンっていうと、とかくクリフジャンプのヒトというイメージがあるけど、クリフなんてかれのノリのほんの一部なんです、アルペンのレースはやんないけど、パイプでもパウダーでもなんでもやる、ダミアンはねえ、コブも好きなんです、**コブもやるけど、コブが好きなんてヒト、あまりいないでしょ、**アルペン系の人が技術の誇示のためにやるくらいで……90年の3月、ダミアンのところに遊びに行ったとき、「スコアバレーのいっちゃんオモロイとこに連れてったるわ」と言いよって連れてかれたのが林間のコブだったんですわ、堅いしボコボコだしとても付いてけない、ダミ公はハッハー、ハッハーと笑いながらびゅんびゅん飛ばすんですわ、デイブ・シオーネやクリス・ローチとかダミアンのとこに居候していた若い連中は、そんなダミアンに必死でついてって、うまくなりおったんですわ。

ISHIの弁護証言その—4

「ダミ公、クリフジャンプの真実」

第一に、クリフジャンプじゃなくて、クリフドロップなんですわ、ウインドのジャンプみたいにプラスの角度のスロープを踏み切ってビヨーンと空に飛び出すんじゃなくて（そんなことすると放物線が複雑になって危険すぎる）、マイナスの角度のスロープから膝を胸につけるようにフッと離れて下にドロップするの、それが前提ね、第2の前提はフラット・ランディングを避けること、ダミアンたちがいちばん恐れるのは、クリフの高さや途中に岩があることじゃなくて、着地点が、柔らかいことはもちろん、フラットじゃないことなんです、フラットだと着地の衝撃を100%受けるし、雪に埋もれて窒息しちゃうんだな（実際ダミアンは、ビデオ・クリティカルコンディションのなかで、フラットランディングではないが、先に飛んだショーン・ファーマーが作った穴にハマり、**7分間埋まって窒息死しかけた**）、上から見ると、着地点がフラットじゃないほうがもちろん高く見えて怖い、人間の目は横からじゃなくて斜面上に立って斜面を見ると角度を錯視しやすいから、飛んでみないごとにはどれくらいの高さか分からない。怖いけど、フラット・ランディングするよりははるかに安全なんです、ビデオは正面から撮ることが多いから、着地点に斜度があることが分かりにくい、だから素人がダミアンの真似をして、低いクリフでフラット・ランディングする、低く見えて怖くないからなんだけど、それがいちばん危険なんですわ。

ISHIの弁護証言その—5

「ダミアン不遇の時代」

87年、88年になるとすでにダミアンはスーパースターでアバランチのシグネチャーモデルとともに彼の名は世界的になっていて、同時にスノーボードもメジャーになりつつあった。とうぜんレースまじめ派、ハーフパイプまじめ派のなかには、面白くなく思っている連中もいた、クレイグ・ケリーはダミアンと仲良しだったけど、当時はかれも大会だけやってた時代だったんです、スノーボード界の体制側もメディア・イメージを気にし過ぎて、モヒカンのダミアンにクリフジャンプとか好きにやられるのを恐れ、必要以上に神経質になった（と思う）、で、バック・フリップ（パイプでのバック転エアー）を禁止した、バック・フリップはダミアンが開発したトリックで、当時はかれしかメイクできなかったから大会での大きなハンデになった。逆にいうと、ダミアンという存在がそれほど大きかったわけです。
ダミアンが**フリーランに力を入れてビデオスターになった**のは、そういう事情もあったんです。

被疑者提出証拠物件その②

主演危険的ビデオ

THE WESTERN FRONT

☆89年に発売された、メーカー・ビデオではないインディペンデント作品で、後のフリーラン／エクストリームビデオのブームを作った。それまで風にしか聞こえなかったダミアンのクリフジャンプやバックフリップが収録され、この映像が、彼のメジャーデビューの切っ掛けとなった。

20 TRICKS

☆タイトルの通り20のバイブ・トリックを収録したビデオ。ダミアンはイントロでバックフリップ、本編ではシスターオブマーシーのバックミュージックにのって、メリハリとスケールのあるイグアナ・アリューブとリーン・トゥ・ステイルフィッシュを披露している。日本語版もあり。

SNOWBOARDERS IN EXILE

☆タイトルのEXILEとは流刑とか国外追放者、とかいった意味で、ビデオの出演者たちはその通り、危険行為のため前作のロケ地レイク・タホを追われたのだった。ダミアンは、クリフジャンプしながらバックフリップ、さらに悪名を高め、クリス、スティーブらもEXILEの立場を確立。

CRITICAL CONDITION

☆ダミアンを始めショーン・ファーマー、ニック・ペラタ、マイク・ランケットらスノーボード界の反主流派が勢揃い、無茶を競った作品で、ダミアンはクリフジャンプの着地で7分間埋まり「窒息死しかけた」配給側も世間への影響を懸念したのか、クラッシュシーンも収められている。

かね、

DS●あまりよくは知りません、

——●知りません!? じゃあどうやってチェックするのかね、

DS●自分で感じるんです、気分がのらないとやめる、そういうことです、雪崩を予測するのは雪山のプロでも難しいよ、リスキーだと思ったら止す、雪崩で死ぬなんて最悪だよ、

——●君は傷害保険に入ってるのかね、

DS●ノーノー、どこの保険会社も入れてくんないよ、ロイズでも無理なんじゃないの、

——●まあいいだろう、ダミアンくん、君は69年、ワシントン州のバンクーバーで生まれた、幼少時、きみは精神的に問題があったらしいな、

DS●イエス、HYPER-ACTHVE（軽い躁病）で、4つのとき精神科にかかりました、**だってクルマに4回もはねられたんだよ、幼児期だけで4回も！** いや怪我はなかったんだけどね、ぼくが右も左も見ないでいきなり路上に飛び出すもんだからむりないよね、運転手こそいい迷惑さ（笑）

——●うーむ、そのビョーキはまだ完治してないようにも思えるが……、

DS●今は少なくともいきなり路上には飛び出さないよ（笑）

——●まあいい、ダミアン一家は81年、カリフォルニアのレイク・タホに移った、君は13歳のクリスマスに、ママにスノーボードをねだった、が、兄のクリスがママに買わせず、自分で作ってくれた、それがアバランチ・スノーボードとダミアン・サンダースのキャリアの始まりとなった（弁護証言㊷参照）、と、この事実に間違いはないな、

DS●はい、

——●初めてスノーボードした日のことを覚えているかね、

DS●ああ、もう10年もまえのことさ、ブーツはソレルでハイバックもなくて、トゥターンはできるけど（ハイバックがなかったから）ヒールターンができない、どころか、いつブーツが脱げるかとビクビクしてなくちゃなんない、でもパウダーで、すぐに4回5回とターンできるようになったよ、

——●ふつーの人はスノーボードをマスターするうえで、スティーブネスやスピードの恐怖の克服が壁になるんだが、君の場合はどうだったね、

DS●ぼくが始めたのはタホのダナー・スキーランチといういい小さい山で、スティーブな斜面がなかった、だから怖いとか感じることはなかったよ、

——●君は、82年になるともう大会に出るようになった、ダナースキーランチのダウンヒルの大会だったな、レースのあとのワンメイクジャンプで無名の少年がばかっ飛びしてると評判になって君は世に出た、レースよりも、そっちのほうが盛り上がったというじゃないか、いらい君は世の中の主流に背を向けている、スラロームをもっと真面目にやろうとか、思わなかったのかね、

DS●このスポーツのなかで、いくら稼いでいるとかは別にして、**自分だけがコンピートする必要のないスノーボーダーであるという点を気に入ってるよ、** ぼくのライディングはスペシャルだ、誰でもコンピートすることはできる、でもコンピートせずに生き残っているスノーボーダーは少ない、スティーブ・グラハム、デイブ・シオーネ、クリス・ロークとかは世界的に優れたスノーボーダーだと思う、どんな斜面でも滑れるし、どんなトリックもできる、アンディ・ヘッツェル、デイナ・ニコルソンなんかもすごくいいね、**ただレースしたり、ハーフパイプするだけでは、このスポーツの可能性を充分に見せることはできないからね、**

——●そうだな、君は確かに大会を無視して、かつ自分の立場を確立している、それはあれかね、自分で計算してそうしたのかね、

DS●いや、フリーライディングがいちばん楽しいから、こうなったのです、大会も嫌いじゃないよ、友だちもできるし、整備されたハーフパイプに入れるし、でも人から、あの大会に出ろ、あのクリフを飛べ、などと指図されるのが厭なんです、

——●そのうえ君は私生活も派手で、奔放だしね、

DS●そう、ロックスターみたいなもんだよ（笑）、いつも何かしらワイルドなことが起こってるし、それを楽しんでる、それはフェイク（無理して演じる嘘っぱち）じゃない、それが実生活なんです、**多くの人は自分を変えることでお金を得てますよね、**

エイズ？ぼくはいつもスピードスーツつけてセイフ・セックスだよ、

ぼくはそうじゃない、自分らしくしていることでお金を得てる！すごいことだよ、

ぼくのスポンサー、アバランチ、ブラックフライなんかもぼくのやり方を気に入ってくれて、好きにやらせてくれます、とてもハッピーです、

——●その、黒ともパープルともつかないミョーな髪の色も、そのライフスタイルの一部なのかね、

DS●23年間もブロンドだったから飽きちゃったんだよ、

——●ベントハウス誌のプレイメイトと結婚したのもその一部なのかね、

DS●はは、ブランディとは3年前にあるレストランで知り合ったんです、少し話して電話番号を交換して……そのときは彼女がベントハウスのモデルだとは知らなかった、そのことについて少し話して、それから結婚しようかということになった、知り合って半年だったかな、1年くらいして、何というか彼女はタカビーになってしまい、ニューヨークでもっとメジャーなモデルになると言いだして、離婚したんだ……、

——●君はモテるのかね？　モテるんだろうな、ちくしょう、

DS●はは、そう願うよ、でも女の子に敬遠されてるような気もする、みんなまだぼくが結婚してると思ってるじゃないかな、ぼくはいまは（語気を強めて）独身なんだよお（笑）

——●エイズ検査は陰性なんだろうね、

DS●エイズ検査はブランディと結婚したとき受けたよ、**いつもスピードスーツをつけてセイフ・セックスしてるしねっ**（笑）

——●プロ・スポーツ選手にとっては、イメージがときに実力以上に重要になるもんだが、君もイメージ操作をやっておるのかね、

DS●無理はしてない、好きでやってるんだけれど、髪形とかファッションとかは、イメージ操作と言えなくもないね、

——●しかし君はあれだね、こうして話してみると意外に静かだね、舌をびろーんと出したりもしないし、噛み付きもしない、

DS●こうしてただ座って話してると落ち着いてくる、（クスクスと笑って）でもスノーボードしたりディスコで踊ったりしてるとほんとの自分が出てくる（笑）

——●君っ！　そこに隠してるものはなんだね、提出しなさい、

DS●（ボーダークロスのコース設計図を開いて）これはスノーボード・モトクロスみたいなもんです、6人とか10人とか同時にスタートして、洗濯板みたいなギャップやバンプがいっぱいあるコースを滑るんだ、ダブルジャンプ、トリプルジャ

ISHIの弁護証言その—⑥

「前妻・ブランディちくりばなし」

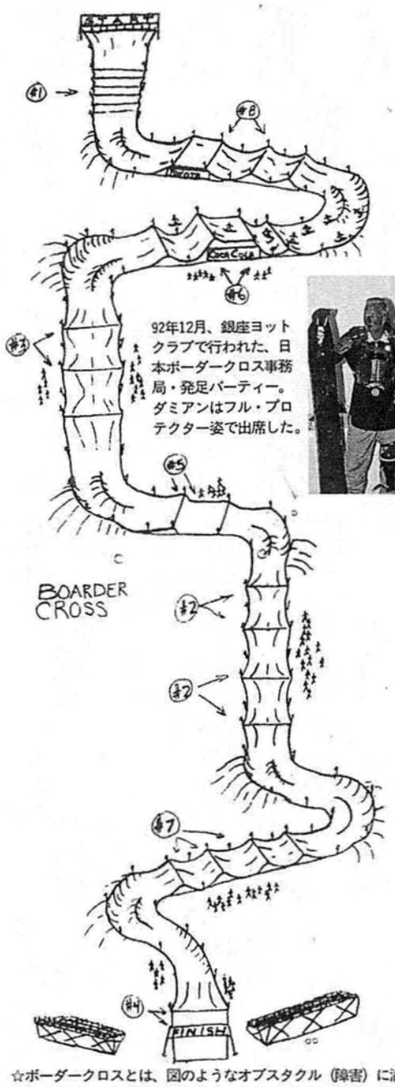
別れた奥さんのブランディがベントハウス誌のモデルだった（91年5月号のベントハウス・ガールになった）のは有名なはなしですが、ダミアンの兄貴のクリスはやっぱり結婚には反対で、ダミアン結婚するらしいねと電話すると、その話はしないでくれ、と言い、ダミアンに電話すると「来週結婚するんだっ」と大はしゃぎなの。ブランディはねえ、ぼくと初めて会ったとき「わたしブランディ、ナゴヤしってる」と日本語で言いおったんですわ、聞けば**名古屋でゴーゴーダンサーやってたらしい。** ダミアンも、彼女のまえで「これがおれの新しい女、前のは終わったんだよ」と言いおった。

「前の」はリー・トンプソン似のかわいいタイプだったのにいきなりゴージャスねーちゃんで私もびっくりしましたよ。彼女はベントハウスの専属じゃなくて、スタンドでトラック・ドライバー向けに売ってるような3流のエロ本とかでも仕事してて、裏表紙のテレホン・セックスの広告で、サーフボードをマタに挟んだり、牧場でマタを開いてたりしてた。なんでそんなことまで知ってるかというと、ダミアンがクルマや応接間にそういう本をいっぱい置いてるんです、ダミアンとブランディと二人でショウインシンを指で開いている写真を見せて、このときのギャラはいくらだったのぉとか言われて私はどうリアクションしていいものか困りました。結婚していたころは噂もジョイントしてました、「ダミアン、またカナダで50フィートのクリフ、やったらしいぜ」、「ブランディ、またオッパイにシリコン入れたらしいぜ」というふうに。

©Bud Fawcett 1991

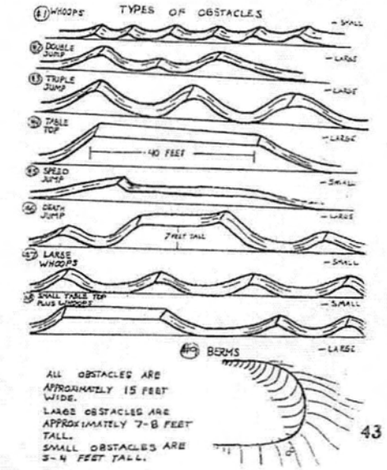
被疑者提出証拠物件その③

新種目コース設計図（甲自筆）"BOARDER CROSS"



92年12月、銀座ヨットクラブで行われた、日本ボーダークロス事務局・発足パーティー。ダミアンはフル・プロテクター姿で出席した。

☆ボーダークロスとは、図のようなオブスタクル（障害）に満ちたコースを設定、複数人で同時スタートし、着順を競うレースである。妨害も可能で、選手はヘルメットやニープロテクターなど防具を付ける。今シーズンからアメリカでサーキットが行われる予定。これはダミアンが92年3月のセーラムのため来日した際、記したコース案で、このときの話が実り、日本ボーダークロス事務局が発足、今年2月、飯綱高原にコースを造成、一般に解放される予定である。



©Bud Fawcett 1990

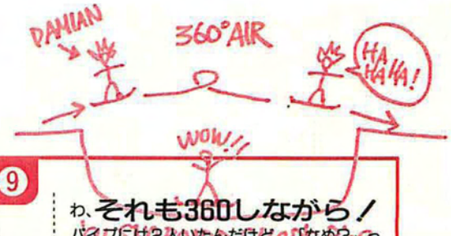
ISHIの弁護証言その―7

「ダミアンとショーン・パルマーの似てるとこ、違うとこ」

非アルペン系スノーボーダーで、ダミアンと同じくらい強い個性を持ってるのはショーン・パルマーで、両者ともバッドボーイというイメージがありますが、**ダミアンはバッドに見せようとしていて、ショーンは本当にバッドなんです。**えらい違いです。ショーンは他所のキャンプのパイプに入ったりランページにドリルで穴を空けたりパーティでグーで殴り合いして至日青タンで試合したりワールドカップでマイク・ジャコビーと入れ替わったりしてフッド出入り禁止を食らったりしますがダミアンにはそういうところはいっさいありません。

ハーフパイプでも率先してスコップで整備して、練習が終わったあともきちんとスコップで直して帰るし、サインを求められたらどんはときにもきちんとサインしてやりポケットを探ってステッカーをあげたりするんです。基本的に育ちがよくて優しい人で、待ち合わせ場所に走ってきたりします。なぜそーゆー人がモヒカンにするのかというと、「ミーンなふうに見せたい、ファッションの一部」と本人が言ってるように、**イメージ戦略**なんです。ショーン・パルマーも生まれつきバッドなわけじゃなくて、アメリカの少年にはそういうイメージや行動がウケるから、プロとして生き残るために多かれ少なかれ演技しているわけで、そういう意味ではダミアンと同じです。

スノーボードはもっとタフになって、スキーとは違う道を歩むべきだ、



ンプ、ビッグジャンプ！　10か15フィートくらいは飛べるんじゃないかな、肘はカラダから離してはいけないんだけど、妨害も許されていて危険だから、アメフトみたいにヘルメットとかエルボーパッドなどの防具をつけて滑ります、アメリカでは91年からコンペティションをやっていて、今シーズンからサーキットになるんだ、

（※この自筆の設計図は63ページに掲載したもの。ダミアンは92年３月、湯沢パークで行われたセーラムの大会に来日したとき、暇だったのでこの図を描き、結果的にボーダークロスを日本に紹介することになった。この図が、日本ボーダークロス事務局を発足させる切っ掛けとなったのである。現在、長野の飯綱高原スキー場にコースを造成中で、２月には一般に解放される。大会が開催される可能性もある）

ISHIの弁護証言その―8

「わしはダミアンが泣いたのを２回見たぞ」

大会になると、凄いあがってしまうんです、87年、88年ころは、みんなフリーランが凄いの知ってるから、大会でダミアンが皆目で落ち込むと、会場全体の雰囲気まで重くなっちゃう、ハーフパイプの出番が迫ると顔を真っ赤にして、動きも明らかにぎこちない、途中でコケて、コケるともう高くは飛べないから、ひよひよひよと滑って降りてきてガックーンと雪に顔を埋めて泣いちゃう、ブランディが肩を抱いて**「あなたはほんとは強いんだからね」**と慰める、そういうシーンを２度見ました。88年のブレッケンリッジと、90年のルスツです。優勝したのは、88年のダナースキーランチ・プロアマという小さい大会だけじゃないかな。理由は分からない、最初の大会で失敗して苦手意識ができたのか、他人に冷静にジャッジされることに耐えられないのか……でも、みんな納得したんです、ダミアンがパイプに入ると、なんか相容れないように見えるんです、**パイプという器が、ダミアンには狭く見える。**ダミアンは常に新しいことをするから、ルーティンな演技や練習は嫌いなはずで……ああ、あいつは大会には向かねーんだなって、みんな納得しちゃったんです。

ISHIの弁護証言その―9

「やつは幅10mのパイプを飛び越えよったっ」

目撃したのはぼくじゃなくて、カメラマンの樋貝くんなんだけど、91年のカナダ・ブラックコムのサマーキャンプでね、クレイグ・ケリーのキャンプでコーチしていたダミアンがスノーボード・ショップのケンがやってたパイプにひゅーんと滑って来てね、ハーフパイプを飛び越えよったんですわ、**それも360しながら！**パイプには２人いたんだけど、「なめ？」ってかんじできょとんとしてたらしいですよ、ふつうそういう大技をやるときは、雪盛ってジャンプ台を作って、よーし、いくぞっ、みたいにやるんですが、**ひゅーん、あ、やっちゃった、はは、**というのがダミアンらしいし、飛んだあとひゅーんと滑ってっちゃうのもダミアンらしい、ケンが大声で呼び止めたんです、怒るんだと思ったら、ダミアーン、写真撮るからもう１回やって、って言ったんだってさ。

―●君はまた、君が勝てると思ってボーダークロスに熱心なんだろ、

DS●はっはー、ぼくのスタイルではあるけれど勝てるかな、ショーン・パルマーやスティーブ・グラハムらが強敵になるだろうし、フリースタイラーにもスラローマーにも活躍のチャンスがある、ニッポンのスモウレスラーがジョインしたら一巻の終わりだ（笑）

―●ま、楽しそうではあるな、

DS●**スノーボードはもっとタフなスポーツになるべきだし、スキーとは違う道を歩むべきだ、**スキーの真似をしてダウンヒルなんかやっても絶対かなわない、スノーボードはあんなに高速、鋭角には曲がれない、ボーダークロスには可能性がある、スノーボードの運動性にマッチしてるし、何より見て楽しい、

―●スノーボードに関する他のビジョンもあるかね、

DS●道具に関しては、ボードはまあいいとして、バインディングとブーツがまだ不完全だと思う、この改善にも取り組んでゆきたいと思ってる、

（※弁護証言②のとおりアバランチは先進的なメーカーで世界で初めてプレート・バインディングを商品化、ダミアン自身もハードブーツを履いてハーフパイプに入っている。現在ＯＰから出ているダミアン・ブーツはハードでもなくソフトでもない特異な商品だが、写真で見ただけなので詳しくは解説できない）

―●じゃあダミアンさん、インタビューはこれで終わります、本、できたら送りますので、え？　５部、了解しましたっ。

92年３月　湯沢パーク・スキー場にて。

†89年の第１回ＯＰプロ、Ｇ.Ｓ.アーム・プロテクターは87年のエコバレー・チャレンジで優勝、気を良くして自作したものである。

ISHIの弁護証言その―10

「ダミ公のアルペン優勝秘話」

このインタビューで、ダミアンはアルペンのレースなんか出たことないと発言してますが、トボけてるんでしょう、本当は何回も出場して、優勝もしとります。それも日本の大会、87年暮れに全日本選手権・関東地区大会と併催されたエコーバレー・チャレンジ、通称エコチャレの第２回大会のデュアル・スラロームです。ダミアンはアバランチのプロモーションで来日してたんですが、片手間遊び半分で出場して、予選ではやっと勝ち上がっていったんですがヒートを重ねるたびに早くなって、とうとう優勝をさらっちゃった。ぼくはＤＪをしててウイナーズ・インタビューをやったんですが、ダミアンが言うには「今シーズンあまり滑ってないんだよねー、ポール入るの初めてなんだよね、**レースなんかやる気ねえんだけどさあ、いやあ嬉しいよ**」みたいな内容で、エコチャレは賞金が良かったから前回優勝者の玉井太郎や竹内正則、牛山基樹、関規明らそうそうたるメンバーがそろっていて、私は通訳する勇気がありませんでしたよ。

翌年タホのダミアンの家に行ったら、プラスチックの板を暖炉で炙ってハンドプロテクターを自 作していて、テープを切り張りしてMORE AIRというステッカーにして貼って、ポールをカンカン当てる真似をしていいだろって自慢してました。ダミアンって、そういうかわいいやつなんです。